

チベットにおける『カーヴィア・アーダルシャ』の受容： 第2章第8・9詩節に関するカムトウル4世の解釈

拉加本

1 はじめに

チベットでは8世紀から数多くのインド仏教文献が断続的に取り込まれ、チベット語に翻訳されることで、独自の仏教文化が開花した。それと共にサンスクリット文法書、美文詩、詩論書などの世俗的文献もチベット語に翻訳され、チベット古典文化の形成に寄与した。7世紀頃の詩論家ダンディン (Daṇḍin)¹が著したサンスクリット詩論書『カーヴィア・アーダルシャ (詩の鏡)』(Kāvyaḍarśa)²もそうした文献の一つである。

『カーヴィア・アーダルシャ』は13世紀後半にチベット語に翻訳され、『ニエンガー・メロン』(Snyan ngag me long)の題目でチベット大蔵経に収録された。その後、翻訳の改訂が重ねられ、チベットの知識人達の間で広く読まれることとなった。チベット版『カーヴィア・アーダルシャ』は今日に至るまで宗派を問わず、チベットの多くの僧院で教科書として使われている他、現代のチベットの中学校・高等学校・大学でも学ばれている。チベットの多くの仏教文献は美文詩の装飾要素によって書かれており、チベットの学僧たちの論書には美文詩の装飾要素の影響が見られる。また歴史書や伝記などにも美文詩が多く使われており、仏教、歴史、医学、文学など全ての学問を研究する上で詩論の知識が不可欠である。

チベットの学者達は時代が経つにつれ、『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳に関して数多くの註釈を作り出した。しかし、それらの註釈の中には、サンスクリット原典の意図とはかけ離れた理解を提示するものがあり、チベット人註釈者がサンスクリット原典を読まずに、自分の師から伝えられた見解だけを頼りに解釈を与えることも多かった。この問題を深く認識した18世紀のカムトウル4世テンジン・チューキ・ニマ (Kham sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma: 1730–1779)は、インドの『カーヴィア・アーダルシャ』註釈の伝統に基づき、過去のチベット人の一部の解釈への批判を含む新たな註釈書『サラスヴァティーの言葉の海』(Dbyangs can ngag gi rol mtsho, 以下『言葉の海』と略す)を著した。

本研究の目的はカムトウル4世による註釈書『言葉の海』を中心として、チベットにおける『カーヴィア・アーダルシャ』の受容史を明らかにすることである。この目的を果たすために、まずチベット語訳『カーヴィア・アーダルシャ』の成立史を分析する。次に、チベットで成立した註釈の歴史を示した後、カムトウル4世の生涯と著作を紹介する。最後に、『カーヴィア・アーダルシャ』第2章第8・9詩節³に対するカムトウル4世の註釈の和訳を提供する。

¹ダンディンは南インド出身のバラモンで、7世紀から8世紀の間に活躍した人物であると考えられる (Bronner 2011: 110)。主要な作品として詩論書『カーヴィア・アーダルシャ』(Kāvyaḍarśa)と叙事詩『十若人の冒険』(Daśakumarācarita)がある (辻 1973: 109)。

²『カーヴィア・アーダルシャ』は3章から構成される。Böhtlingk校訂本によれば、第1章は105詩節、第2章は368詩節、第3章は187詩節、全体で660の詩節からなる。『カーヴィア・アーダルシャ』は美文詩 (kāvyā, snyan ngag)の本体 (śarīra, lus)、装飾要素 (alaṅkāra, rgyan)、過失 (doṣa, skyon)という三つの項目を説明している。

³『カーヴィア・アーダルシャ』第2章で説かれる最初の装飾要素である本質描写 (svabhāvokti, rang bzhin brjod pa)には下位項目として種 (jāti, rigs)の描写、行為 (kriyā, bya ba)の描写、性質 (guṇa, yon tan)の描写、実体 (dravya, rdzas)の描写という四つのものがある。本研究では本質描写の定義に当たる第2章第8詩節とその下位項目の一番目である「種の本質描写」(jātisvabhāvokti, rigs kyi rang bzhin brjod pa)に相当する第9詩節を取り上げる。

2 チベット語訳『カーヴィア・アーダルシャ』の成立

7世紀から13世紀初めにかけて、チベットでは多くのサンスクリット語仏典が翻訳されたが、その間に詩論書が翻訳されることはなかった。最初に『カーヴィア・アーダルシャ』をチベットに紹介したのはサキヤ・バンディタ・クンガ・ギェルツェン (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan: 1182–1251) である。彼は自身の論書『学者入門』(Mkhas pa 'jug pa'i sgo) の中で『カーヴィア・アーダルシャ』の第1章と第2章の主要部分を自身で翻訳し、内容紹介を行なっている。全訳は1267年から1270年の間にショントウン・ロツァーフ・ドルジェ・ギェルツェン (Shong ston lo tsā ba rdo rje rgyal mtshan: 13世紀) とラクシュミーカラ (Lakṣmīkara) によって完成される。

その後、ジネンドラブッディ (Jinendrabuddhi) の『集量論複註』(Pramāṇasamuccayaṭīkā) の翻訳者として知られるパン・ロツァーフ・ロドゥ・テンパ (Dpang lo tsā ba blo gros brtan pa: 1276–1342) が翻訳の改定を行ない、さらに、ナルタン・ロツァーフ・ゲンドゥン・ペル (Snar thang lo tsā ba dge 'dun dpal: 14世紀)、ニェタン・ロツァーフ・ロドゥ・テンパ (Snye thang lo tsā pa blo gros brtan pa: 15世紀中葉)、シャル・ロツァーフ・チューキョン・サンポ (Zha lu lo tsā ba chos skyong bzang po: 1441–1528) がインドから将来した新資料を利用して改定を行なった。そして、18世紀に、文法学者として有名なシトゥ・パンチェン・チューキ・ジュンネー (Si tu paṇ chen chos kyi 'byung gnas: 1699–1774) による批判的校訂訳 (1772年) が完成する⁴。

ナルタン版・北京版・金写版のテンギェルに収録されるのはパン・ロツァーフによる改訂版であり⁵、デルゲ版のテンギェルに収録されるのはニェタン・ロツァーフによる改訂版である⁶。シトゥの批判的校訂訳はシトゥ著作集 (bka' 'bum) に収録される。

3 チベットにおける『カーヴィア・アーダルシャ』註釈の伝統

『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳の成立後、チベットで多くの学者達が本書について註釈を作るようになった⁷。それらの内、代表的なものを以下に挙げる。

現存するチベット最古の註釈は13世紀のショントウン・ロツァーフによる『詩論書の首飾り』(Snyan ngag gi bstan bcos mgul rgyan) である。続いて14世紀から15世紀の間に、パン・ロツァーフの註釈『論書の意味の解明』(Gzhung don gsal ba, 「パン註釈 (Dpang ṭika)」の略称で広く知られる)、およびリンブン・ガワン・ジクテン・ワンチュク・タクパ (Rin spungs ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa: 15世紀) の註釈『畏れなき獅子吼』(Mi 'jigs seng ge nga ro) が成立した。

17世紀には同時代の二人の人物による註釈書が書かれている。ゲルク派のダライ・ラマ5世ガワン・ロサン・ギャンツォ (Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: 1617–1682) による註釈『サラスヴァティーの歓歌』(Dbyangs can dgyes glu) と、カギユ派に属するプーケーパ・ミパム・ゲレク・ナムギェル (Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal: 1618–1685) による註釈『ダンディンの意趣の莊嚴』(Daṇḍi'i dgongs rgyan) である。両者とも『カーヴィア・アーダルシャ』に規定される各装飾要素について、チベット語による例文集 (dper brjod) を併せて作成している。

さらに、18世紀には、ドゥク・カギユ派でシトゥ・パンチェンの弟子であるカムトゥル4世が『言葉の海』という浩瀚な註釈を著した。また、ニンマ派のジュ・ミパム・ジャムヤン・ナムギェル・ギャンツォ ('Ju mi pham 'jam dbyang rnam rgyal rgya mtho: 1846–1912) が著した註釈『サラスヴァティーの善海』(Dbyangs can dges pa'i rol mtsho) もある。

⁴van der Kuijp 1996: 396, 桂 2008: 143, Pema and Gyatso 2023: 318ff. を参照。

⁵Dimitrov 2002: 101 を参照。

⁶Dimitrov 2002: 107 を参照。

⁷Pema and Gyatso 2023: 321ff. を参照。

20世紀においてもチベット人による『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈が作成されている。例えば、ツェテン・シャブドゥン（Tshe tan zhabs drung: 1910–1985）による註釈『詩論概論』（*Snyan ngag spyi don*）や、トゥンカル・ロサン・ティンレー（Dung dkar blo bzang 'phrin las: 1927–1997）による註釈『修辞学入門』（*Tshig rgyan rig pa'i sgo 'byed*）などが有名である。また、セツァン・ロプサン・パルデン（Bse tshang blo bzang dpal ldan: 1938–2021）による註釈『サラスヴァティーの微笑みの声』（*Tshangs sras bzhad sgra*）が現代のチベットで広く読まれている。

以下にチベットで著された代表的な『カーヴィア・アーダルシャ』註釈の一覧を示し、例文（dper brjod）の有無についても付記する。

作者名	註釈	例文
シヨントウン・ロツァーフ（Shong ston lo tsā ba rdo rje rgyal mtshan: 13世紀）	『詩論書の首飾り』（ <i>Snyan ngag gi bstan bcos mgul rgyan</i> ）	無
パン・ロツァーフ（Dpang lo tsā ba blo gros brtan pa: 1276–1342）	『論書の意味の解明』（ <i>Gzhung don gsal ba</i> ）	有
ジャムヤン・カチェ（'Jam dbyangs kha che: 14世紀）	『カーヴィア・アーダルシャ第3章の釈文』（ <i>Snyan ngag me long gi le'u gsum pa'i dka' 'grel</i> ）	無
シャーキヤ・チョクデン（Shākya mchog ldan: 1428–1507）	『カーヴィア・アーダルシャ入門』（ <i>Snyan ngag gi bstan bcos me long la 'jug pa'i sgo</i> ）	無
シャル・ロツァーフ（Zha lu lo tsā ba chos skyong bzang po: 1441–1528）	『カーヴィア・アーダルシャ略説』（ <i>Snyan ngag me long gi gnad bsdu pa</i> ）	無
リンブンパ（Rin spungs pa ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa: 15世紀）	『畏れなき獅子吼』（ <i>Mi 'jigs seng ge nga ro</i> ）	無
ダライ・ラマ5世（Ngag dbang blo bzang rgya mtsho: 1617–1682）	『サラスヴァティーの歡歌』（ <i>Dbyangs can dgyes glu</i> ）	有
プーケーパ（Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal: 1618–1685）	『ダンディンの意趣の莊嚴』（ <i>Danḍi'i dgongs rgyan</i> ）	有
ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウ（'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus: 1648–1721）	『サラスヴァティーの口伝』（ <i>Dbyangs can zhal lung</i> ）	無
カムトウル4世（Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma: 1730–1779）	『サラスヴァティーの言葉の海』（ <i>Dbyangs can ngag gi rol mtsho</i> ）	無
カルマ・ツェワン・ペンバル（Karma tshe dbang dpal 'bar: 18世紀）	『詩論註釈：甘蔗論』（ <i>Snyan 'grel bur shing</i> ）	無
ジュ・ミパム（'Ju mi pham 'jam dbyang rnam rgyal rgya mtho: 1846–1912）	『サラスヴァティーの善海』（ <i>Dbyangs can dges pa'i rol mtsho</i> ）	有
ツェテン・シャブドゥン（Tshe tan zhabs drung: 1910–1985）	『詩論概論』（ <i>Snyan ngag spyi don</i> ）	有
ムゲ・サムテン・ギヤムツォ（Dmu dge bsam gtan rgya mtsho: 1914–1993）	『再解明の蔵』（ <i>Yang gsal snang mdzod</i> ）	無
トゥンカル（Dung dkar blo bzang 'phrin las: 1927–1997）	『修辞学入門』（ <i>Tshig rgyan rig pa'i sgo 'byed</i> ）	有
セツァン・ロプサン・パルデン（Bse tshang blo bzang dpal ldan: 1938–2021）	『サラスヴァティーの微笑みの声』（ <i>Tshangs sras bzhad sgra</i> ）	有

『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳やチベット撰述註釈について、van der Kuijp (1996) が概説を与えている。また、チベット語訳やチベット撰述註釈に特化した研究ではないが、『カーヴィア・アーダルシャ』第1章と第3章に関して、Dimitrov (2002, 2011) がチベットにおける伝承を視野に入れた綿密な研究を公刊している。

桂 (2008) はプーケーパの註釈を基にして『カーヴィア・アーダルシャ』第2章に説かれる装飾

要素についての論考を發表している。Nemoto (2014) はジャムヤンシェーパの論書に挿入される美文詩を、ジャムヤンシェーパ自身の『カーヴィア・アーダルシャ』註釈とムゲ・サムテンによる副註に従って分析する試みを行なっている。

2023年に刊行された論文集 *A Lasting Vision: Dandin's Mirror in the World of Asian Letters* の第6章 (Mirror on Fire: An Ardent Reception in Tibet and Mongolia, 編者: Pema Bhum, Janet Gyatso) に収録される論考では、『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳とチベット撰述註釈の成立史、チベットの美文詩の特徴などが論じられ、さらにそれらをめぐる文化史的な考察がなされる。

4 カムトウル4世について

本研究はカムトウル4世による註釈『言葉の海』を主たる対象とする。以下にカムトウル4世の生涯と著作について述べる。

4.1 カムトウル化身ラマの由来とその系譜

カムトウル4世は、チベット仏教カギユ派の一派、ドゥクパ・カギユ派 ('Brug pa bka' brgyud pa) に属するカムトウル化身ラマの第4世である。歴代のカムトウル化身ラマは「ドゥク・カムトウル」 ('Brug khams sprul) とも呼称される。

カムトウル化身の系譜はカルマ・テンペル (Karma bstan 'phel: 1569–1637) に始まる。チベット東部カム地方のコツァ・リンチェン・ガン (Kho tsha rin chen sgang) に生まれた大行者カルマ・テンペル、別名ガワン・テンペル (Ngag dbang bstan 'phel) は、マルタン・リウオチェ僧院 (Mar thang ri bo che) で出家し、マルタン座主ジェドゥン・ツォケードルジェ (Rje drung mtsho skyes rdo rje: 1530–1590) やカルマパ9世ワンチュク・ドルジェ (Dbang phyug rdo rje: 1556–1603) などに師事し、特にラツェ・ガワン・サンポ (Lha rtse ngag dbang bzang po: 1546–1615) のもとでドゥクパ・カギユ派の教義を学んだ。

ドカム地方 (Mdo khams) にドゥクパ・カギユ派の思想を広めて数多くの弟子を育てた彼はドカムパ (Mdo khams pa) という名で呼ばれたので、彼の転生者はカムトウル (Khams sprul) という名称で呼ばれるようになった。「カムトウル」とは「(ド)カム(パ)の化身」という意味である。以下に示すのがカムトウル歴代転生者である⁸。

代	転生者 (年代)
カムトウル1世	カルマ・テンペル (Karma bstan 'phel: 1569–1637)
カムトウル2世	クンガ・テンペル (Kun dga' bstan 'phel: 1639–1678)
カムトウル3世	クンガ・テンジン (Kun dga' bstan 'dzin: 1680–1728)
カムトウル4世	テンジン・チューキ・ニマ (Bstan 'dzin chos kyi nyi ma: 1730–1779)
カムトウル5世	ドゥブギユ・ニマ (Sgrub brgyud nyi ma: 1781–1847)
カムトウル6世	テンペー・ニマ (Bstan pa'i nyi ma: 1849–1907)
カムトウル7世	サンゲェ・テンジン (Sangs rgyas bstan 'dzin: 1909–1929)
カムトウル8世	トンギユ・ニマ (Don brgyud nyi ma: 1931–1979)

4.2 カムトウル4世の生涯

カムトウル4世の事績に関する記述を含む重要な資料として次のものがある。

- シトゥ8世の自伝 (rang nam)

⁸Mtshan tho rags rim 40.1–41.6 を参照。

- カムトウル5世ドゥプギユ・ニマの『クンガ・テンジン本生譚伝記』（*Kun dga' bstan 'dzin gyi skyes rabs rnam thar*）
- カムトウル8世トンギユ・ニマの『梗概目録』（*Mtshan tho rags rim*）⁹

また、カムトウル4世の略伝がトゥンカル・ロサン・ティンレーの『トゥンカル大辞典』（*Dung dkar tshig mdzod chen mo*）や、ノルタン・オギエン（Nor brang o rgyan: 1933-）による『言葉の海』への序文の中にもある¹⁰。以下ではこれらの資料に依拠してカムトウル4世の生涯について述べる。

カムトウル4世テンジン・チューキ・ニマ、別名ダヤン・ダワ・ドゥツィ・ランツォ（Sgra dbyang zla ba bdud rtsi'i lang tsho）は、1730年チベット東部カムのザトウ（Rdza stod）地方のゲギエ（Dge rgyas / Dge rgyal）地区¹¹（現青海省玉樹州雜多県内）の領主であった父ラワン（Lha dbang）と母ソナム・ドンマ（Bsod nams sgron ma）¹²の間に生まれた。4歳（1733年）¹³の時、カムトウル3世クンガ・テンジンの化身として認定され、即位した。9歳（1739年）の時、後に重要な師となるシトゥ8世に初めて出会う。16歳（1745年）の時、カタ・カルモ（Kha stag dkar mo, 現チベット自治区昌都區察雅県内）からプンツォク・チューコルリン（Phun tshogs chos 'khor gling）僧院を昌都県（現チベット自治区昌都區昌都県内）に移設する。19歳（1748年）の頃、ドゥブデ・サンチェン・トントル・リン（Sgrub sde gsang chen mthong grol gling）僧院を建立した。

その後、シトゥ8世の下でカギユ派の思想を学んだ他、サンスクリット文法、チベット語綴字法、詩論を学んだ。文法家・詩論家として傑出したシトゥ8世から教示を受けたカムトウル4世は、従来の『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳には問題点が多く存在することを深く認識し、25歳（1754年）の時、自身の『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈『言葉の海』を著作した。

カムトウル4世は同じ年にラサへ赴き、ダライ・ラマ7世に謁見した¹⁴。26歳（1755年）から28歳（1757年）までの間、チベットのカイラス山、マパム湖、ミラレパの修行洞窟を巡礼し、さらにネパールへ赴きネパール王に謁見した。29歳（1758年）からの9年間、ドゥクパ・リンポチェに随行してネパール、中央チベットのツァン地方などを巡り、ドゥクパ・カギユ派やチョナン派の思想を学んだ。33歳（1763年）の時にカム地方に戻り、多くの信者の前で説法をした。36歳（1765年）の時、シトゥ8世の下で俱舍学と中観思想を学び、同じ年、顕教寺ナムギェル・チューコルリン（Mtshan nyid dgon rnam rgyal chos 'khor gling）を建てた。

41歳（1770年）の時、自身が25歳の時に著した『言葉の海』を改訂した。45歳（1774年）の時、師シトゥ8世が入滅した。そして、カムトウル4世も50歳（1779年）の年、3月10日に入滅した¹⁵。

⁹正式の題目は『ドゥクパ・カギユ派の教法護持者カムトウル歴代転生者の総本山カムパ・ガルベル・ブツォク法輪院およびその末寺・山寺に所蔵される所依（経堂）と能依（仏像など）の梗概目録』（*'Brug pa dkar brgyud kyi bstan 'dzin khams sprul sku rabs rim byon gyi gdan sa gtso bo khams pa sgar dpal pun tshogs chos 'khor gling dang de'i dgon lag ri khrod bcas kyi rten dang brten pa'i mtshan tho rags rim*）である。

¹⁰その他に、グル・タシ（Gu ru bkra shis: 18世紀）の『グタ仏教史』（*Gu bkra chos 'byung*）にもカムトウル4世に関する記述があるが、カムトウル3世クンガ・テンジンとカムトウル4世テンジン・チューキ・ニマを混同している点や、年代に関する混乱が見受けられる点など、様々な問題がある。

¹¹Skyes rabs rnam thar 158b6を参照。

¹²『ゲギヤル・ナクツァン僧院村落史』（*Dge rgyal nag tshang dgon sde'i byung rabs*）は母の名をツァンザ・カルドク（Tshang bza' dkar ldog）と記す（*Dge rgyal byung rabs* 250.2–251.13）。

¹³以下、カムトウル4世の年齢を数え年で示し、西暦の年号を括弧内に示す。

¹⁴Skyes rabs rnam thar 164a6–b1を参照。

¹⁵Skyes rabs rnam thar 174a4–5を参照。

4.3 カムトウル4世の著作

カムトウル5世の『クンガ・テンジン本生譚伝記』によれば、カムトウル4世は『言葉の海』の他にも多くの著作を残している。以下は彼の主な著作である¹⁶。

1. 『俱舎論広釈および考究』（*Mngon pa mdzod kyi rgyas 'grel mtha' dpyod dang bcas pa*）
2. 『現観莊嚴論註釈』（*Mngon rtogs rgyan gyi 'grel bshad*）
3. 『根本般若中頌広釈』（*Rtsa ba shes rab kyi rgyas 'grel*）
4. 『旧新密言乗の生起次第・究竟次第に関する難語釈』（*Gsang sngags gsar rnying bskyed rdzogs kyi dka' gnad*）
5. 『教戒を与える御歌の次第』（*Zhal gdams gsung mgur gyi rim pa*）
6. 『疑念のもつれをほどく問答』（*The tshom mdud pa grol bar byed pa'i dri lan*）
7. 『ヴィシュヌの十化身の物語』（*Khyab 'jug gi 'jug pa bcu'i gtam*）

現在、筆者の知る限り、インドでカムトウル4世の一卷本の著作集¹⁷が出版されているのみであり、全集（*gsung 'bum*）の存在は確認されない。カムトウル4世の著作に対する本格的な研究は今後の課題である。

4.4 カムトウル4世の生年について

『カム・トゥ地方略史』（*Khams stod lo rgyus*）によれば、カムトウル4世は庚戌年（*lcag khyi'i lo*, 1730年）の生まれである¹⁸。また、カムトウル5世の『クンガ・テンジン本生譚伝記』が伝える所によれば、カムトウル3世の遺書には、自身の転生者となるカムトウル4世が「庚戌年」（1730年）にゲギエで生まれるであろうと予言する記述がある。20世紀の学者トゥンカル・ロサン・ティンレーはこれらの資料に従って、カムトウル4世の生年を1730年としている¹⁹。

ところが、『蔵漢大辞典』巻末の年表はカムトウル4世の生年を1745年としている²⁰。カムトウル4世自身が『言葉の海』の奥書（*mdzad byang*）で同書の第一稿の作成時期を「甲戌年」（*rab 'dod shing khyi*）（1754年）と記載しているので、もし仮に1745年にカムトウル4世が生まれたとすれば、彼は『言葉の海』の第一稿を9歳の時に著したことになる。ノルタン・オギエンが『言葉の海』への序文で述べているように、このような大著を若干9歳という年齢で書いたとは到底考えられないので、『蔵漢大辞典』の年表に示される生年はおそらく誤りであろう²¹。

5 註釈書『言葉の海』について

カムトウル4世による『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈は、チベットにおけるサンスクリット詩論の受容と展開を探る上で重要な資料である。正式な題目は『修辞学書カーヴィア・アー

¹⁶*Skyes rabs rnam thar* 170b3ff. を参照。

¹⁷『カムトウル4世の著作集および筆頭弟子ソナム・ラブペル著作集』（*Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma'i gsung skor dang zhal slob thu bo bsod nams rab 'phel gyi gsung*）である。弟子のソナム・ラブペル（*Bsod nams rab 'phel*: 18世紀）の著作も含まれる。

¹⁸*Khams stod lo rgyus* 139.1–14. を参照。

¹⁹*Dung dkar tshig mdzod*, s.v. *Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma* を参照。なお、グル・タシとトゥンカル・ロサン・ティンレーは、カルマ・テンペルをカムトウル転生者に含めず、クンガ・テンペルをカムトウル1世とみなして、テンジン・チューキ・ニマをカムトウル3世としている。

²⁰*Bod rgya tshig mdzod chen mo* 3277 を参照。

²¹*Nor brang o rgyan* 1986: 4–8 を参照。

ダルシャを偉大な学者である尊師がお説きになった通りに説明するサラスヴァティーの言葉の海：妙説という宝の源』（*Rgyan gyi bstan bcos me long pan chen bla ma'i gsung bzhin bkral ba dbyangs can ngag gi rol mtsho legs bshad nor bu'i 'byung khungs*）である。

題目が示すように、本書はカムトウル4世の「尊師」すなわちシトゥ8世の見解に従って著されたものである。この註釈の中でカムトウル4世は、インドの詩論家ダンディンの『カーヴィア・アーダルシャ』をできる限りサンスクリット原典に沿って読解し、先行のチベット人解釈を批判しながら自身の新たな解釈を提示している。以下、『言葉の海』の著作経緯を紹介した後、科文（sa bcad）の構成に従って概要を示す。

5.1 『言葉の海』の著作経緯

『言葉の海』の著作目的は、冒頭の敬礼文（mchod brjod）に続けて語られる著作宣言の言葉から推しはかることができる。

sngon chad byang phyogs 'di na tshul 'di'i gzhung ||
 smra ba'i khur chen len pa mang byung yang ||
 da dung ma rtogs log rtogs rnam mang bas ||
 de rnam dpyod pa'i rig pa mun nang mdas ||
 gzhung don dka' gnas 'phen la reg pa med ||
 des na kho bo mkhas pa'i rjes 'brangs te ||
 dri ma med pa'i ngag gis cung zad bshad ||

「昔、この北国（チベット）では、この理論書についての講説という重荷を担う者が多く現れたが、様々な無理解と誤解のゆえに、それを考察する知という、闇の中を進む矢は、論書の意味の難解であるが重要な点という標的に未だ当たっていない。それゆえ、私（カムトウル4世）は賢者に従って、清らかな言葉を用いて〔論書の意味の難解であるが重要な点を〕少し説明しよう。」

de yang phan phyir yin gyi sdang bas min ||
 shes nas yin gyi spyi brtol bskyed de min ||
 'on kyang deng dus skye bo rnam par rmongs ||
 blo ldan 'ga' yang sdang dang phrag dog gis ||
 rnam par dkrugs 'dis legs bshad don gnyer dkon ||

「しかし、それは〔他者への〕利益のためであり、〔昔の学者達に〕怒りを覚えるからではない。正しく理解した上で〔説明するの〕であって、牽強付会によって〔説明するの〕ではない。しかしながら、昨今の人々は愚かである。ある知者は怒りと嫉妬によって混乱している。このような理由から妙説を求める者は稀である。」

de lta na yang drang po'i blo can gyi ||
 mkhas pa srid na de rnam dga' bskyed cing ||
 tshul 'dir 'jug pa rnam la'ang phan pa'i phyir ||
 rang nyid smra ba'i spobs pa zhan mod kyang ||
 mkhas pa'i gsung gsang bsten la cher 'dris pas ||
 de nyid ma bslad 'di na rnam par 'god || (*Rol mtsho* 3.14–4.9)

「そうであるとしても誠実な心を持つ賢者がもし存在し得るならば、彼らを喜ばせるために、さらには、この理論に入門する者達を益するために、私自身（カムトウル4世）は論述能力が劣っているけれども、賢者の秘教を信奉することには慣れているので、まさにその〔論書の意味の難解であるが重要な点〕をけがすことなくここに提示しよう。」

ここに示唆されているのは、カムトウル4世がそれまでのチベットで書かれた『カーヴィア・アーダルシャ』註釈に疑問を持っていたこと、賢者（mkhas pa）すなわちシトゥ8世の教えに従って、自身の新たな註釈を著したということである。カムトウル4世が『言葉の海』の著作に際し、疑問点をシトゥ8世に質問したことは、次に引用する『クンガ・テンジン本生譚伝記』の記述からも知られる。

slob dpon chen po dbyug pa can gyi byas pa'i rgyan gyi bstan bcos snyan ngag me long ma'i 'grel bshad bod kyi mkhas pa du mas mdzad pa mang na'ang | de dag gis ma rtogs pa dang | log par rtog pa'i rigs su gyur pa mang bar dgongs nas | rje 'di nyid kyis | 'phags yul du yod pa'i rgya 'grel rnam kyi dgongs don rtsa bar bzung | dogs sel dgos rigs kun mkhyen si tu las rim zhus mdzad tshad ma gsum gyis yongs su brgyan pa sngon med 'grel bshad dbyangs can ngag gi rol mtsho legs bshad nor bu'i 'byung khungs su grags pa 'di nyid mdzad | (*Skyes rabs rnam thar* 339.1–4; cf. *Rol mtsho* 19.15–20.6)

「大軌範師ダンディンによって著作された修辞学論書『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈として、複数のチベットの学者達がお作りになったものが数多くあった。しかし、彼らの無理解や誤解といった類のことが多くあるのを考慮なさって、まさにこの尊者（カムトウル4世）は、インドに現存するサンスクリット註釈が意図している考えを基盤とし、疑問点を払拭する必要がある箇所については、一切智者シトゥ8世にそれぞれ質問なさり、三つの認識根拠（知覚・推理・聖言）で飾られた、これまでにない新しい註釈『言葉の海』として名高い同書を著作なさった。」

ここに述べられるように、カムトウル4世は疑問点をシトゥ8世に質問するだけでなく、自らサンスクリット註釈を調査し、インドの伝統的見解に基づいた合理的解釈を追究している。『言葉の海』にはラトナシュリージュニャーナ（*Ratnaśrījñāna*）とヴァーギーシュヴァラキールティ（*Vāgīśvarakīrti*）の註釈が幾度も引用あるいは言及される。彼自身がシトゥ8世の手元にあったサンスクリット註釈の原典を実際に見たか、もしくはシトゥ8世からそれらのインド註釈の情報を得たのであろう。

『言葉の海』は長い年月にわたる改訂を経て完成された著作である。第一版が作られたのは25歳（1754年）の時である。その後、カムトウル4世は、チベット語版『カーヴィア・アーダルシャ』の旧訳と註釈を比較検討し、自身の研究ノートを見ながら繰り返し推敲を重ね、41歳（1770年）の時に最終版を完成した。この経緯についてノルタン・オギエンは以下のように述べている。

dgung lo nyer lnga rab 'dod shing khyi spyi lo 1754 lor | snyan ngag me long ma'i 'grel chen dbyangs can ngag gi rol mtsho zhes bya ba 'di nyid brtsams pa dang | de nas lo ngo bcu drug ring 'chad rtsod rtsom gsum gyi mdzad pa gzhan dang chabs cig yang nas yang du dbri snon dag bcos legs par mdzad de mthar dgung lo zhe gcig rab 'dod lcags stag spyi lo 1770 lo yongs su grub par mdzad | (*Nor brang o rgyan* 1986: 1–2)

「[カムトウル4世は] 25歳の年、甲戌年すなわち1754年に『カーヴィア・アーダルシャ』の大註釈『言葉の海』という本書を最初に作成した。それから16年間にわたって、他のものに関する講義（'chad）、論議（rtsod）、著作（rtsom）という三つのお仕事をしながら、繰り返し加筆、削除、推敲をなさって、ついに41歳、庚寅年すなわち1770年に[同書を]完成した。」

5.2 『言葉の海』に対する後代の評価

カムトウル4世の註釈『言葉の海』は後代のチベットで高く評価されている。例えば『クンガ・テンジン本生譚伝記』に次のような記述が見られる。

slad nas snyan ngag smra ba kun la phan don cher 'gyur ba dang | chos sbyin mi zad pa'i phyir | gnas lnga rigs smra ngag dbang chos 'phel la par gzhi thog mar bri ba'i rtsol ba sgrub tu 'jug pa gnang zhing rim pas 'phrul bskos la mkhas pa phyogs kyi grangs ldan gyis par du bsgrubs pas | bod dang bod chen po'i ljongs kun yongs su khyab cing | ris med grub pa'i srol 'dzin mkhas pa'i go sar bzhugs pa thams cad kyis rnam dag legs bshad kyi bstan bcos chen por dgongs nas | snyan ngag gi don nyams su bzhes pa dang | gzhan la 'chad spel thams cad 'grel chen 'di la bstan nas mdzad mkhan mang | (*Skyes rabs rnam thar* 339.4–340.2)

「後に〔本書は〕全ての詩論家にとって有益なものとなるであろうし、また〔本書がもたらす〕法施は尽きることがないであろうから、五明処に通じる学者ガワン・チューペルに命じて、印刷用の原稿を最初に筆写する労務を遂行させ、段階を経て、数多の巧みな彫師に〔命じて〕部分に分けて少しずつ印刷を完成させた。それにより〔本書は〕チベットおよび大チベット（bod dang bod chen po）の全地域に行き渡った。そして、無宗派（ris med）の行者の伝統を継承する賢者の座におられる全ての人々が〔本書を〕正しい金言の大論書であるとお考えになった。また、詩の内容を鑑賞し、他者に教え広めるといった全てのことをこの大註釈に従ってなされる者が多く〔現れた〕。」

『クンガ・テンジン本生譚伝記』の作者であるカムトゥル5世の時代に、既に『言葉の海』が全チベットで読まれていたことを示唆する記述である。また、トゥンカル・ロサン・ティンレーは『言葉の海』を以下のように評している。

khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi mas mdzad pa'i snyan 'grel dbyangs can ngag gi rol mtsho ni | rang nyid kyi bla ma si tu pañ chen chos kyi 'byung gnas kyis rgya 'grel rgya dpe ma gnyis kyi steng nas gsung bshad gnang ba'i zin bris gzhir bzung nas bris pa yin stabs | snyan ngag me long gi 'grel pa'i nang nas rgyas shos su 'dug par ma zad | snga 'grel rnam las ches gsal zhing legs bshad che bas | blo gros che ba rnam kyis gzhung de nyid rang bltas na bzang | (*Tshig rgyan rig pa'i sgo 'byed* 20.1–7)

「カムトゥル4世が著作なさった『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈『言葉の海』は、〔カムトゥル4世〕自身の師であるシトゥ8世が二つのインド撰述註釈に立脚してなさった講義の備忘録を基にして書かれたものである。それゆえ、『カーヴィア・アーダルシャ』の諸註釈の中で最も詳細であるのみならず、以前の諸註釈に比べてより明瞭であり、より優れた妙説であるので、知力に優れる者達は同書のみを学ぶと良い。」

トゥンカルが述べるように、カムトゥル4世の『カーヴィア・アーダルシャ』の註釈は二つのインドの註釈書、すなわちラトナシュリージュニャーナとヴァーギーシュヴァラキールティの註釈に依拠して書かれている。このことが、チベット撰述の諸註釈における『言葉の海』の独自性を高めることにつながっている。

5.3 『言葉の海』科文

『言葉の海』の科文構成は以下の通りである。

- 0.1 本書の敬礼文²²
- 0.2 五明処の学習の意義
- 0.3 明処についての概説

²²第一の科文「1. 論書への入門に関する説明」の前に詳細な序論がある。カムトゥル4世自身は序論を分節していないが、西藏人民出版社より出版されているチャペル・ツェテン・ブンツォク（Chab spel tshe brtan phun tshogs: b. 1922）編の刊本の目次に従って0.1–0.6の科文を設ける。

0.4 美文詩の位置づけ

0.5 『カーヴィア・アーダルシャ』チベット語訳史

0.6 論書の作成

第一章

1 論書への入門に関する説明

2 表現対象である美文詩の意味に関する略説

2.1 文体と装飾要素についての略説

2.2 文体と装飾要素の詳説

2.2.1 文体の詳説

2.2.1.1 文体の定義

2.2.1.2 文体の分類

2.2.1.2.1 韻文

2.2.1.2.2 散文

2.2.1.2.3 混合体

2.2.2 装飾要素の詳説

2.2.2.1 様式の区分 (lam dbye ba) : [南部と東部に] 独自 (thun mong ma yin pa) の装飾要素

2.2.2.1.1 様々な様式 (lam) についての説明

2.2.2.1.2 南部様式と東部様式の区分

2.2.2.1.2.1 十の性質 (yon tan bcu) についての略説

2.2.2.1.2.2 十の性質についての詳説

2.2.2.1.2.2.1 緊密性 (sbyar ba)

2.2.2.1.2.2.2 明快性 (rabs dwangs)

2.2.2.1.2.2.3 均一性 (myam nyid)

2.2.2.1.2.2.4 甘美性 (snyan pa)

2.2.2.1.2.2.5 優美性 (shin tu gzhon pa)

2.2.2.1.2.2.6 意味の明白性 (don gsal)

2.2.2.1.2.2.7 卓越性 (rgya che nyid)

2.2.2.1.2.2.8 力感 (brjid pa)

2.2.2.1.2.2.9 愛好性 (mdzes pa)

2.2.2.1.2.2.10 転移 (ting nge 'dzin)

2.2.2.1.2.3 十の性質に関する内容のまとめ

2.2.2.1.3 美文詩完成の三つの要因

第二章

2.2.2.2 [東部と南部に] 共通の装飾要素の説明

2.2.2.2.1 共通の装飾要素の第一：意味の装飾要素 (don gyi rgyan)

2.2.2.2.1.1 術語の分類

2.2.2.2.1.2 分類項目の確定

2.2.2.2.1.2.1 装飾要素の最初の三十五個の説明

2.2.2.2.1.2.1.1 本質描写 (rang bzhin brjod pa)

2.2.2.2.1.2.1.2 直喩 (dpe)

2.2.2.2.1.2.1.3 隱喩 (gzugs can)

2.2.2.2.1.2.1.4 燈明 (gsal byed)

2.2.2.2.1.2.1.5 再起 (bskor ba)

2.2.2.2.1.2.1.6 否認 ('gog pa)

2.2.2.2.1.2.1.7 他事例導入 (don gzhan bkod pa)

2.2.2.2.1.2.1.8 較喩 (ldog pa can)

- 2.2.2.2.1.2.1.9 喚起 (srid pa can)
- 2.2.2.2.1.2.1.10 合成描写 (bsdus brjod)
- 2.2.2.2.1.2.1.11 誇張描写 (phul byung)
- 2.2.2.2.1.2.1.12 空想 (rab brtags)
- 2.2.2.2.1.2.1.13 原因 (rgyu)
- 2.2.2.2.1.2.1.14 微妙 (phra mo)
- 2.2.2.2.1.2.1.15 韜晦 (cha)
- 2.2.2.2.1.2.1.16 順序 (rim pa can)
- 2.2.2.2.1.2.1.17 歡喜 (dga' ba)
- 2.2.2.2.1.2.1.18 具情緒 (nyams ldan)
- 2.2.2.2.1.2.1.19 豪勇 (gzi brjid can)
- 2.2.2.2.1.2.1.20 婉曲描写 (rnam grangs brjod pa)
- 2.2.2.2.1.2.1.21 一致 (kun tu phan)
- 2.2.2.2.1.2.1.22 高貴 (rgya che ba)
- 2.2.2.2.1.2.1.23 隱蔽 (bsnyon dor)
- 2.2.2.2.1.2.1.24 掛詞 (sbyar ba)
- 2.2.2.2.1.2.1.25 特殊化 (khyad par brjod pa)
- 2.2.2.2.1.2.1.26 同一結合 (mtshungs par sbyor ba)
- 2.2.2.2.1.2.1.27 背反 ('gal ba)
- 2.2.2.2.1.2.1.28 主題外の称賛 (skabs min bstod pa)
- 2.2.2.2.1.2.1.29 偽りの称賛 (zol bstod)
- 2.2.2.2.1.2.1.30 例示 (nges par bstan pa)
- 2.2.2.2.1.2.1.31 共描写 (lhan cig brjod pa)
- 2.2.2.2.1.2.1.32 交換 (yongs brjes)
- 2.2.2.2.1.2.1.33 祝福 (shis brjod)
- 2.2.2.2.1.2.2 他に考えられる装飾要素がこれらに含まれる理由
- 2.2.2.2.1.2.3 後の二つの装飾要素の説明
- 2.2.2.2.1.2.3.1 混合 (rab spel)
- 2.2.2.2.1.2.3.2 意匠 (dgongs pa can)
- 2.2.2.2.1.2.4 戯曲を特徴づけるものも装飾要素であるという説
- 2.2.2.2.1.2.5 結論および提示されていない装飾要素の学習方法

第三章

- 2.2.2.2.2 共通の装飾要素の第二：言葉の装飾要素 (sgra'i rgyan)
- 2.2.2.2.2.1 同音節反復 (zung ldan) の概念の確定
- 2.2.2.2.2.1.1 同音節反復についての略説
- 2.2.2.2.2.1.2 同音節反復についての詳説
- 2.2.2.2.2.1.2.1 一つの詩脚の冒頭に現れる同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.2 他に現れる同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.3 挟み込みの同音節反復 (mtha' thog sbyar ba'i zung ldan)
- 2.2.2.2.2.1.2.4 小箱の同音節反復 (kun tu zung ldan)
- 2.2.2.2.2.1.2.4.1 詩脚の同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.4.2 詩節の同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.4.3 大なる同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.5 各詩脚に連続もしくは分離した同音節反復
- 2.2.2.2.2.1.2.6 逆読みの同音節反復
- 2.2.2.2.2.2 作り難い詩 (bya dka' ba'i snyan ngag)
- 2.2.2.2.2.2.1 牛の放尿 (ba lang gcin)

- 2.2.2.2.2.2 周回（'khor ba）
- 2.2.2.2.2.3 母音などが限定される作り難い詩
 - 2.2.2.2.2.3.1 母音が限定される作り難い詩（母音の規則）
 - 2.2.2.2.2.3.2 発音部位が限定される作り難い詩（発音部位の規則）
 - 2.2.2.2.2.3.3 子音が限定される作り難い詩（子音の規則）
- 2.2.2.2.3 共通の装飾要素の第三：謎かけの装飾要素（gab tshig gi rgyan）
 - 2.2.2.2.3.1 謎かけの装飾要素に関する定義
 - 2.2.2.2.3.2 謎かけの装飾要素に関する分類
 - 2.2.2.2.3.3 謎かけの装飾要素の説明
 - 2.2.2.2.3.4 他に欠陥ある謎かけ
- 2.2.3 過失の排除（skyon sel）
 - 2.2.3.1 事義の消失（don nyams pa）
 - 2.2.3.2 事義が相容れないこと（don 'gal）
 - 2.2.3.3 同義（don gcig）
 - 2.2.3.4 具疑念（the tshom can）
 - 2.2.3.5 順番の混乱（rim pa nyams pa）
 - 2.2.3.6 語の破損（sgra nyams）
 - 2.2.3.7 休止の乱れ（ngal gso nyams pa）
 - 2.2.3.8 崩れた韻律（sdeb sbyor nyams pa）
 - 2.2.3.9 連声の欠如（mtshams sbyor nyams pa）
 - 2.2.3.10 矛盾（'gal ba）
 - 2.2.3.10.1 矛盾の定義
 - 2.2.3.10.2 矛盾の分類
 - 2.2.3.10.2.1 土地矛盾（yul 'gal ba）
 - 2.2.3.10.2.2 時に関する矛盾（dus 'gal ba）
 - 2.2.3.10.2.3 芸術に関する矛盾（sgyu rtsal 'gal ba）
 - 2.2.3.10.2.4 世間との矛盾（'jig rten dang gal ba）
 - 2.2.3.10.2.5 論理との矛盾（rigs pa dang 'gal ba）
 - 2.2.3.10.2.6 教義との矛盾（lung dang 'gal ba）
 - 2.2.3.10.3 矛盾があるが過失でない場合（'gal yang skyon med pa）
- 2.3 『詩の鏡』の内容のまとめ
- 3 美文詩習得の功德

奥書および祈願文

6 翻訳について

以下に訳出するのは『カーヴィア・アーダルシャ』第2章第8・9詩節に対する『言葉の海』の註釈（*Rol mtsho* 2.8.0–2.9.9）である。『言葉の海』には数種の版があるが、本研究ではブータンで出版された木版印刷本（Thim）と青海民族出版社より出版された洋装本（Mtsho）を参照した。翻訳を提示する際、カムトゥル4世自身が与える科文を細分化し、*Rol mtsho* 2.8.0, *Rol mtsho* 2.8.1等々とした。

『カーヴィア・アーダルシャ』本文については、シトゥ8世の改訂版チベット語訳に従って和訳を施し、サンスクリット原典に基づく解釈を脚注に示した。

『言葉の海』チベット文に異読が存在する場合には、採用する読みに従った解釈を本文中に示し、その他の読みに従った解釈を注に示した。和文において原語を提示する際には丸括弧（ ）を用い、訳文中に補足を加える際には亀甲括弧〔 〕を用いた。

和訳では、『カーヴィア・アーダルシャ』の本文、および『言葉の海』の註釈中に現れる本文対応表現を太字で示した。

7 翻訳研究

[Rol mtsho 2.8.0] 導入

第一（導入）に関して三十三点ある。その内、第一「本質描写」という装飾要素について三点ある。[1]〔本質描写の〕定義。[2]〔種の描写などの〕四種の表現手段を用いた作文の例示。[3]内容のまとめと〔本質描写を独立の〕装飾要素とする説明。

[Rol mtsho 2.8.1] 本質描写の定義（『カーヴィア・アーダルシャ』2.8）

第一。〔本質描写の定義は以下の通りである。〕

dngos po rnam kyī rang bzhin dang || gnas skabs sna tshogs dngos gsal byed ||
de ni rang bzhin brjod pa dang || rigs zhes dang po'i rgyan yin dper ||²³

諸事象の本質と多様な状態を²⁴直接的に明らかにするものが本質描写であり、種〔の描写〕と呼ばれる第一の装飾要素である。例文は以下の通り。

[Rol mtsho 2.8.2] 『カーヴィア・アーダルシャ』2.8 に対するカムトゥルの解釈

表示対象である諸事象の本質とは、種 (rigs, *jāti), 行為 (bya ba, *kriyā), 性質 (yon tan, *guṇa), 実体 (rdzas, *dravya) の四者である。被限定者であるそれらのいずれかの状態、すなわち特徴を、単一の様態ではなく、多様な様態を有するものとして、褒貶や婉曲表現に染まることなく、単なる間接的表示ではなしに直接的に、言葉の表示機能に基づいて明らかにする装飾要素がある。事象の実相について増益も損減もせず、褒貶の要素を離れて、ありのままに語るものであることから、それを本質描写 (rang bzhin brjod pa, *svabhāvokti) という装飾要素と呼ぶ。それぞれの特徴づけられるべき被限定者と関係する多数多様な特徴を、他者の排除 (gzhan sel, *anyāpoha) を目的として表現するものであるという点から、それを種〔の描写〕 (rigs, *jāti) という装飾要素と呼ぶ。

[Rol mtsho 2.8.3] 本質描写の同義語

その二者は同一の意味を持つ単なる同義語であり、種〔の描写〕をはじめとする四組の本質描写の上位概念 (spyi ming)²⁵である。すなわち三十三個の「意味の装飾要素」(don rgyan) に含まれる諸項目の内第一の装飾要素である。さらに、それ自体を細分すると、種、行為、性質、実体〔を描写する本質描写〕という四つのものがあり、それらの例文は以下の通りであると言われる。順にそれぞれの〔四つの〕例文への導入をなしており、それらを指している。

[Rol mtsho 2.8.4] サキャ・パンディタの解釈

そして、以上の通りであることについての〔文献的〕根拠は次のものである。まずインドの二つの註釈 (ラトナシュリージュニャーナ註, ヴァーギーシュヴァラキールティ註)²⁶で直接的

²³ KĀ 2.8: nānāvasthaṃ padārthānaṃ rūpaṃ sāksād vivṛṇvatī | svabhāvoktiś ca jātiś cety ādyā sālaṃkṛtir yathā || (「諸事象の多様な状態を有する本質を直接的に明らかにするために〔起こる〕装飾要素が本質描写であり、種〔の描写〕と呼ばれる第一の装飾要素である。例文は以下の通り。」)

²⁴ dngos po rnam kyī rang bzhin dang gnas skabs sna tshogs 「諸事象の本質と多様な状態を」。サンスクリット原文は nānāvasthaṃ padārthānaṃ rūpaṃ 「諸事象の多様な状態を有する本質を」。チベット語訳では「本質」と「状態」とが並置されるが、サンスクリット原文によれば「状態」は「本質」に属する限定要素である。カムトゥルはチベット語訳の dang 助詞を無視し、サンスクリット原文に従った解釈を提示している。

²⁵ 「種の描写」(rigs, *jāti) という術語は二義を有する。すなわち、「本質描写」と同義のそれと、四組の本質描写の内の第一のものとして挙げられる「種に関する本質描写」とである。前者は上位概念、後者は下位概念である。

²⁶ ラトナシュリージュニャーナ註は以下の通りである。 Rṭ (on KĀ 2.8) 69.15–16: ādyā prathamā alaṅkāreṣv

に明示されている。また、サキャ・バンディタ文殊依怙（'Jam mgon sa skya paṇḍita）は

「諸事物を²⁷直接的に描写するもの²⁸が本質描写および種〔の描写〕である。」²⁹

と『学者入門』（*Mkhas pa 'jug pa'i sgo*）の中で説いており、それに対する自註で

「韻文の構成形式には二種のものがある。すなわち、本質の描写（rang bzhin bsngags pa）と種の描写（rigs bsngags pa）である。前者は諸事物の実相を誤りなく〔描写するもの〕であり、後者はそれと関係する属性を描写するもの（brjod pa）である。」³⁰

と述べている。

[*Rol mtsho* 2.8.5] パン・ロツァーフの解釈

さらに、パン大翻訳官（Dpang lo chen po）は

「表示されるべき諸事物の本質を、単一の状態ではなしに、多数多様の状態を有するものとして、ありのままに、直接的に、すなわち間接的ではない表示手段の機能によって明らかにするものは、本質描写の名を持つものである。それは別の呼び方で『種の〔描写という〕装飾要素』とも呼ばれる第一の装飾要素である。」³¹

と述べている。これらは当該詩節で〔本質描写が「種の描写」と呼ばれることの〕根拠となる。

[*Rol mtsho* 2.8.6] プーケーパの解釈と他説への批判

したがって、プーケーパ・ミパム・ゲレク・ナムパル・ギェルワ尊者（Rje bod mkhas pa mi pham dge legs rnam par rgyal ba）は、ご自身が著した註釈や『意味の装飾要素に関する疑念の払拭と論議の善説：遊戯の大海』（*Don rgyan la dogs pa gcod pa'i 'bel gtam legs par bshad pa'i dbyangs can ngag gi rol mtsho*）という書の中で〔『カーヴィア・アーダルシャ』本文の〕意味の要点を正しく理解なさった上で正しく註釈しているけれども³²、他の全てのチベット註釈では、種〔の描写〕をはじめとする四者の上位概念として、「本質描写という装飾要素」という術語が〔不適切な形で〕使用される。それだけでなく〔多くの註釈者達は〕「種〔の描写〕という装飾要素」という術語が同義語として使用されることを知らずに、本文の翻訳については dang po'i rgyan yin rigs sogs dper 「…が第一の装飾要素であり〔それを分類すれば〕種の描写などがある。例文は以下の通り」というものを採用しているが、それは正しくない。

[*Rol mtsho* 2.9.0] 導入

第二「四種の表現手段を用いた作文の例示」についてさらに四点ある。その内の第一点、すなわち「種を描写する本質〔描写〕という装飾要素」は以下の通りである。

iha svabhāvoktir nāma veditavyā jātir nāma vā |（「それはここなる諸々の装飾要素の中で第一のもの〔ādyā = prathamā〕であり、本質描写と呼ばれるものである、もしくは種〔の描写〕と呼ばれるものであると知るべきである。」）

²⁷ngo bo 「諸事物を」。『サキャ・カンブム』（*Sa skya bka' 'bum*）に収録される木版本には ngo bos 「諸事物によって」とある。

²⁸bsngags pa 「描写するもの」。一般的に bsngags は「称赞」を意味する。サキャ・バンディタは『学者入門』に対する自註でこれを brjod pa 「描写」という言葉で置き換えている。

²⁹*Mkhas 'jug* 182a3: ngo bos dngos su bsngags pa ni || rang bzhin brjod dang rigs yin te ||

³⁰*Mkhas 'jug* 182a3–4 からの引用。サキャ・バンディタは「本質の描写」と「種の描写」を区別しているようにも見えるが、カムトゥル4世はこの記述を二者の同義性を示すものとして理解しているようである。

³¹*Dpang tik* 27a3–4 からの引用。

³²rigs という訳語の意味については *Dogs gcod 'bel gtam* 3a4ff. に詳しく論じられる。

[*Rol mtsho* 2.9.1] 種を描写する本質描写の例文（『カーヴィア・アーダルシャ』 2.9）

mchu ni dmar zhing gug pa dang || gshog pa ljang zhing mnyen pa dang ||
mgrin pa kha dog gsum 'phreng can || ne tso 'di dag tshig 'jam ldan ||³³

嘴は赤くて曲がり、羽は緑で柔らかく、喉は三色（白，黒，緑）の線を持つこれらの鸚鵡は甘い言葉を有する。

[*Rol mtsho* 2.9.2] 『カーヴィア・アーダルシャ』 2.9 に対するカムトウルの解釈

嘴は色が赤くて形は曲がり、羽は色が緑で触感が柔らかく、喉は色が白，青，赤の三色の線を持つこれらの鸚鵡は甘く発せられる鳴き声（tshig = sgra）を有する。以上が本文の意味である。

[*Rol mtsho* 2.9-3] tshig の語義

この箇所に関して〔カルマ・ツェワン・ペンバルの〕註釈『甘蔗論』（*Bur shing*）に

「第一章に『情趣を有する〔美文詩〕（nyams ldan, rasavat）は甘美なるものである。言葉と〔事象のいずれにも情趣は存在する〕』³⁴と説かれる。（…中略…）〔ここで tshig は〕文法学説（sgra'i lugs）で言われるような、格接辞で終わる語（tshig, *pada）を意味するのではなく、アビダルマ説で言われるような、単語の集合により形成される文（tshig, *pada）を意味するでもない。では何かとえば、軌範師ラトナシュリーが tshig ni sgra'o (gñ̄ śabdah)³⁵と仰っている通りである。」³⁶

と説かれる。ここでは鸚鵡全般を遍充する種が描写されているのであるから、これもまさしく正しい説明である。

[*Rol mtsho* 2.9.4] ete śukāḥ 「これらの鸚鵡」の解釈・他者の排除について

さらに、「これらの鸚鵡」は種を表す表現（rigs kyi sgra）である。残余の言葉は、被限定者を明らかにするために、その多様な特質あるいは属性を描写したものであり、それでないものを除外する表現、すなわち他者を排除する表現（gzhan sel gyi sgra）である。例えば「木」や「牛」が種を表示する語であり、「根」や「葉」や「枝」や「実」、あるいは「瘤」や「喉袋」などの表現が、自身の属性によってそれぞれの属性保持者を明らかにして理解させ、また、木にあらざるもの、牛にあらざるものを除外するのと同様である。

[*Rol mtsho* 2.9.5] 仏教認識論における「種」の理解

〔サキヤ・パンディタの〕『論理の蔵』（*Rig[s] gter*）³⁷に

³³KĀ 2.9: tuṅḍair ātāmraḱuṭilaiḥ pakṣair haritakomalaiḥ | trivaṇṇarājibhiḥ kaṅṭhair ete mañjugiraḥ śukāḥ ||（「これらの鸚鵡は、赤くて曲がった嘴、緑で柔らかい羽、三色〔白，黒，緑〕の線のある喉によって特徴づけられており、甘い鳴き声を発する。」）

³⁴KĀ 1.51 (Dimitrov 2002: 178–179): madhuraṃ rasavad vāci vastuny api rasaḥ sthitaḥ | yena mādyanti dhīmanto madhuneva madhuvratāḥ ||; snyan pa nyams ldan tshig dang ni || dngos po la yang nyams gnas pa || sbrang rtsi spyod pa sbrang rtsis bzhin || gang gis blo ldan dga' byed pa'o ||（「情趣を有する〔美文詩〕は甘美なるものである。言葉と事象のいずれにも情趣は存在する。蜜によって蜜蜂が喜ぶように、それによって賢者達は喜ぶ。」）

³⁵Rṭ (on KĀ 2.9) 69.24: mañjur madhurā gñ̄ śabdo yeṣāṃ te mañjugiraḥ |（「mañjugir は〔第六格の所有複合語で〕甘い鳴き声を有する者達〔mañju = madhura; gir = śabda〕を意味する。」）

³⁶*Bu ram shing* 106.10–14 からの引用。

³⁷T, M の異本も含めて全てのテキストが *Rig gter* という読みを与えるが、正しくは *Rigs gter* である。

「その種は他者の排除に他ならない。」³⁸

と説かれ、〔ダルマキールティの〕『量評釈』（*Tshad ma rnam 'grel, Pramāṇavārttika*）への自註に

「同類である諸事物の共通性が種であると幾度も説明した（*dnegos po rigs mthun pa rnam kyid 'dra ba nyid gang yin pa de rigs yin no.*）」³⁹

と説かれる通りである。ここでの「嘴は赤くて曲がり、羽は緑で柔らかく、喉は三色の線を持つ、甘い言葉を有する」などの表現も、〔属性保持者である鸚鵡の存在を理解させると共に、鸚鵡にあらざるものを排除することを通じて、〕種あるいは特質あるいは属性を描写するものである。

[*Rol mtsho* 2.9.6] *rigs* の語義

一般に *rigs* 「種」〔というチベット語〕には、[1] 普遍 (*spyi*) を遍充する一つの属性を表示することにより、その部類の多くの特殊 (*bye brag*) よりなるものとして理解されるもの、すなわち *jāti* という〔サンスクリット〕語から導かれたものと、[2] 種族 (*rigs rgyud*) を表す *rigs* 「種」の意味で使用されるもの、すなわち *kula* という〔サンスクリット〕語から導かれたものという二つがある。

これらの内、ここで〔*rigs* 「種」というの〕は前者を意味する。以上のことはプーケーパが教示している通りである⁴⁰。しかしながら、*jāti* という語は、ある所では種族としての *rigs* 「種」の意味で使用される場合もあることを知っておかねばならない。

[*Rol mtsho* 2.9.7] 種の描写とその区分

それゆえ、被限定者あるいは種を表示する表現がこの論書では「鸚鵡」で例示されている。そして、それを手本にして〔他の例を挙げるならば〕「神」、「人」、「動物」、「四天王」、「夜叉」、「バラモン」、「王」など、要するにそれ自体の中でさらに内部項目を区分すれば多数の特殊が存在する所の集合体、すなわち普遍があり、それらの属性を描写するものが種の描写である。実体の描写 (*rdzas brjod pa*) 〔のみでなく、それ〕とは異なった、区別手段となる属性 〔の描写〕 (*'byed chos*) もこれと同じ〔カテゴリー〕によって区分されるものである。

さらに、一般的に本質描写の四つの下位項目として区分されるもの（種・行為・性質・実体の本質描写）はいずれも、被限定者である種を描写するものであるから「種の本質描写」である。そして、被限定者を行為、性質、実体として描写するならば、順にそれぞれのもの（行為の描写、性質の描写、実体の描写）となるので、そのような限定要素によって〔種の本質描写は〕分類される。しかし、多種多様な限定要素を叙述することによって〔被限定者である種が描写されるという点を〕考慮すると、四者共に「種の描写という装飾要素」であるという点で違いはない。

[*Rol mtsho* 2.9.8] 第三格接辞の意味

〔問〕この場合、例文中で本質の状態を叙述する〔べきである〕から、まさに第一格接辞が起

³⁸ *Rigs gter* 37b5 からの引用。福田 1993: 48 の校訂テキストは以下の通りである。 *yal ga lo ma ldan mthong nas || de la shing gi brda byed pa || brda de rigs la sbyor bar byed || rigs ni gzhan sel las gzhan min ||* (福田 1993: 49 の和訳は以下の通り。「枝葉を備えたものを知覚して、それに対して「木」と名付ける。その名称は種 (= 普遍) に対して付与される。〔その〕種は〈他者の排除〉に他ならない。)

³⁹ 『量評釈』自註のチベット語訳にこの記述は見当たらない。

⁴⁰ *Danḍi'i dgongs rgyan* 200.4–5: *ne tso spyi'i rigs la khyab pa'i chos sna tshogs brjod pas gsal bar byas pa'o ||* (「鸚鵡全般という種〔*rigs*〕を遍充する様々な属性を表示することによって〔種の存在を〕明らかにしている。)

こるのが合理であるが、インド原典 (rgya dpe) には kuṭilaiḥ⁴¹ pakṣaiḥ malaiḥ というように、行為手段 (byed pa, *karaṇa) を表示する〔第三格〕接辞が実際の所は見出されるから、種の本質描写にはならないであろう。〔答〕確かにその通りである⁴²。しかし、『カラーパ・ストラ』(Kalāpasūtra) に

「第三格接辞は限定要素を表示する (gsum pa'o || khyad par du byed pa la yang ngo ||)。」⁴³

と説かれる。このストラをはじめとする根拠に基づけば、それらの具格接辞はそれら自体と共にある鸚鵡の限定要素のみを表示しているのものであって、行為手段そのものを表示しているのではない。このようにリンブン王 (Rin spungs sa spyod dbang po)⁴⁴がお説きになっているのは意味に叶った正しい説明である⁴⁵。

[Rol mtsho 2.9.9] 過去のチベット人解釈に対する批判

真相は以上の通りであるにもかかわらず、[1] このチベットに現れた著名な学者として知られる註釈者の殆どはそのことを考慮せずに、純粋な被限定者および限定要素と関係するもの (khyad gzhi tsam dang khyad chos dang 'brel ba), 純粋な被限定者および二者と関係するもの (khyad gzhi tsam dang gnyis ka dang 'brel ba), 何者とも関係しないもの (gang dang yang ma 'brel ba) などに関する画定を論じている⁴⁶。[2] [ある者は]「嘴は赤くて」で始まる最初の三つの詩脚は性質 (yon tan) を描写したものであり、第四詩脚は行為 (bya ba) を描写したものであると認める。[3] また、ある者は自身の註釈で「種〔の描写〕(rigs) というのは、それ自身と同じ種に属する全てものを遍充する限定要素を描写したものである」ということを本文の内容に従って説明した後、例文については「実体の描写」(rdzas brjod) の場合と同じように、ある種の神格との関連付けをして、自分自身の言葉と相矛盾する形で論じている。このような様々なことを私は見聞している。

8 結論

カムトウル4世は、ラトナシュリージュニャーナの註釈、チベットの先行解釈、サンスクリット文法学、仏教認識論などに関する自身の知識を最大限活用することにより『カーヴィア・アードルシャ』を読解している。

カムトウル4世によれば、本質描写は種の描写に等しく、それはあるもの x について述べる時に、 x が持つ多様な属性の描写を通じて、 x にあらずるものを排除し、それによって被限定者である x を浮かび上がらせるというものである。これに関する註釈の中では、仏教認識論における「他者の排除」(gzhan sel) の概念が有効に使われている。

カムトウル4世は必ずしもチベット語訳から導かれる理解にはこだわらず、サンスクリット原典から得られる解釈を行ない、それに基づいて先行のチベット註釈を批判する。また、他方で彼は

⁴¹T, M の異本も含めて全てのテキストが kunilaiḥ という読みを与えるが、サンスクリット原典に従って kuṭilaiḥ に訂正する。カムトウル4世も参照していたであろう、シトゥ・パンチェン著作集に収録される梵蔵テキストにも kuṭilaiḥ とある (KĀ_S 10a1)。

⁴²例文中に第三格接辞 (具格接辞) の表現が現れるというのは、確かにその通りである。しかし、それらの第三格接辞は行為手段を表示するものではない。

⁴³KT 2.4.32: viśeṣaṇe |

⁴⁴リンブンパ・ガワン・ジクテン・ワンチュク・タクパ (Rin spungs pa ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa: 15 世紀) のことを指す。

⁴⁵Seng ge'i nga ro 143.19–144.5 に同様のことが論じられる。

⁴⁶この説が何を意味するかは不明である。典拠の同定とさらなる検討を要する。

リンブンパやブーケーパなどの先行註釈から得られた知識を採用することもある。『カーヴィア・アーダルシャ』第2章第9詩節のサンスクリット原典に現れる第三格接辞については、リンブンパの註釈や、そこに引用されるサンスクリット文典『カラーパ・ストラ（カータントラ）』の規則に基づき、限定要素を表示するものとして理解している。この理解はラトナシュリージュニャーナの解釈とも一致する。同じ詩節のチベット語訳に第三格（具格）表現は現れないので、サンスクリット原典に注意を払わないチベット人註釈者が、リンブンパやカムトウル4世と同じような議論を展開することはないであろう。サンスクリット原典をチベット語に翻訳する伝統が途絶えた18世紀の東チベットという時代的・地理的状況において、サンスクリット原典へ復帰を目指した彼の試みは高く評価されるべきである。

略号と文献

(1) 一次資料

(1-1) インド撰述文献

KĀ *Kāvyaḍarśa* (Daṇḍin): O. Böhtlingk ed. *Daṇḍin's Poetik (Kāvjādarṣa)*. Leipzig: Verlag von H. Haessel. 1890.

KĀ I *Kāvyaḍarśa* Chapter 1 (Daṇḍin): see Dimitrov 2002: 152–207.

KĀ_S *Kāvyaḍarśa* (Daṇḍin): *Snyan ngag me long ma zhes bya ba skad gnyis shan sbyar*. In *Ta'i si tu pa kun mkhyen chos kyi 'byung gnas bstan pa'i nyin byed kyi bka' 'bum*, cha. Sansal: Palpung sungrab nyamso khang. 1990.

Rt *Ratnaśrīṭikā* (Ratnaśrījñāna): Anantalal Thakur and Upendra Jha eds. *Kavayalakṣaṇa of Daṇḍin (Also Known as Kāvyaḍarśa) with Commentary Called Ratnaśrī of Ratnaśrījñāna*. Darbhanga: Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning. 1957.

(1-2) チベット撰述文献

Skyes rabs rnam thar *Kun dga' bstan 'dzin skyes rabs rnam thar* (Khams sprul sgrub brgyud nyi ma). Brag g-yab: Tshogs brgya dgon. 1985.

Khams stod lo rgyus *Khams stod lo rgyus thor bsduṣ kyi stod cha* (Ldan ma 'jam dbyangs tshul khirms). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 1995.

Mkhas 'jug *Mkhas pa rnams 'jug pa'i sgo* (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan): *Dpal ldan sa skya pa'i bka' 'bum (The Collected Works of the Founding Masters of Sa-skya)*, vol. 10 (tha). New Delhi: Nagwang Topgyal. 1993.

Dge rgyal byung rabs *Dge rgyal nag tshang dgon sde'i byung rabs kyi lo rgyus mes po'i rjes dran* (Zla ba'i od zer). S.l.: Gangs ljongs tshan rtsal rig gnas 'phel rgyas gling. 2006.

Daṇḍi'i dgongs rgyan *Snyan ngag gi bstan bcos chen po me long la 'jug pa'i bshad sbyar daṇḍi'i dgongs rgyan* (Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2004.

Dung dkar tshig mdzod *Bod rig pa'i tshig mdzod chen mo shes bya rab gsal* (Dung dkar blo bzang 'phrin las). Beijing: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. 2002.

Dogs gcod 'bel gtam *Snyan ngag gi me long gi don gyi rgyan la dogs pa gcod pa'i 'bel gtam legs par bshad pa'i rol mtsho* (Bod mkhas pa mi pham dge legs rnam rgyal). In *The Literary Arts in Ladakh: A Reproduction of a Collection of Bhotia Manuscripts on Poetics, Prosody, Sanskrit Grammar, Lexicography, Etc. from the Library of the Former Ruling Family*, vol. III (331–423). Darjeeling: Kargyud Sungrab Nyamso Khang. 1976.

- Dpang t̄ik** *Snyan ngags me long gi rgya cher 'grel par gzhung don gsal ba.* (Dpang lo tsā ba blo gros brtan pa). In *Rigs gnas phyogs bsdebs* (pp. 281–502). Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives. 1981.
- Bu ram shing** *Snyan ngag me long gi 'grel bshad sngon med bu ram shing gi ljon pa* (Karma tshe dbang dpal 'bar). Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1994.
- Mtshan tho rags rim** *'Brug pa dkar brgyud kyi bstan 'dzin khams sprul sku rabs rim byon gyi gdan sa gdzo bo khams pa sgar dpal phun tshogs chos 'khor gling dang de'i dgon lag ri khrod bcas kyi rten dang brten pa'i mtshan tho rags rim* (Skal bzang don brgyud nyi ma). Dharamsala: 'Gro phan gtsug lag dpe skrun khang dang a myes rma chen bod kyi rig gzhung zhib 'jug khang. 2007.
- Rigs gter rang 'grel** *Tshad ma rigs pa'i gter gyi rang 'grel* (Sa skya paṇḍita kun dga' rgyal mtshan): *Dpal ldan sa skya pa'i bka' 'bum* (*The Collected Works of the Founding Masters of Sa-skya*), vol. 11 (da). New Delhi: Nagawang Topgyal. 1993.
- Rol mtsho** *Snyan ngag me long gi 'grel pa dbyangs can ngag gi rol mtsho* (Khams sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma). Rgyan gyi bstan bcas dbyangs can ngag gi rol mtsho. Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. 1986.
- Rol mtsho_M** Do. In *Snyan ngag dang mngon brjod: Bod kyi bcu phrag rig mdzod chen mo bka' brgyud pa'i gsung rab*, pod 2 (pp. 29–719). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2004.
- Rol mtsho_T** Do. Rgyan gyi bstan bcas me loñ pan chen bla ma'i gsuñ bzin bkral ba dbyaṅs can ñag gi rol mtsho legs bśad nor bu'i 'byuñ khuñs: *A Detailed Commentary on the Fundamental Text of Tibetan Kāvya, the Kāvyaḍarśa of Daṇḍin by the Fourth Khams-sprul Bstan-'dzin-chos-kyi-ñi-ma. Reproduced from a Rare Manuscript from the Library of Thim-phu Rdzoñ.* Thimphu: Kunsang Topgey. 1976.
- Seng ge'i nga ro** *Snyan ngag me long gi rgya cher 'grel pa mi 'jigs pa seng ge'i rgyud kyi nga ro'i dbyangs* (Rin spungs pa ngag dbang 'jig rten dbang phyug grags pa). In *Snyan ngag: Bod kyi bcu phrag rig mdzod chen mo. dpal ldan sa skya pa'i gsung rab*, vol. 5 (pp. 89–486). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2004.

(2) 二次資料

(2-1) 欧文資料

- Bronner, Yigal
2012 “A Question of Priority: Revisiting the Bhāmaha-Daṇḍin Debate.” *Journal of Indian Philosophy* 40-1: 67–118.
- Dimitrov, Dragomir
2002 *Mārgavibhāga: Die Unterscheidung der Stilarten, Kritische Ausgabe des ersten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyaḍarśa und der tibetischen Übertragung Sñan ñag me loñ nebst einer deutschen Übersetzung des Sanskrittextes.* Indica et Tibetica, Band 40. Marburg: Indica et Tibetica Verlag.
- van der Kuijp, Leonard W. J.
1996 “Tibetan Belles-Lettres: The Influence of Daṇḍin and Kṣemendra.” In *Tibetan Literature: Studies in Genre*, ed. J. I. Cabezón and R. R. Jackson, 393–410. Ithaca: Snow Lion.
- Nemoto, Hiroshi
2014 “Compositional Styles in Classical Tibetan Literature: The Poetic Verse of 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus.” In *Current Issues and Progress in Tibetan Studies: Proceedings of the Third International Seminar of Young Tibetologists, Kobe 2012*, ed. Tsuguhito Takeuchi et al., 303–316. Kobe: Kobe City University of Foreign Studies.
- Pema Bhum and Janet Gyatso
2023 “Mirror on Fire: An Ardent Reception in Tibet and Mongolia.” In *A Lasting Vision: Dandin's Mirror in the World of Asian Letters*, ed. Y. Bronner, 308–361. Oxford University Press.

(2-2) 蔵文資料

Nor brang o rgyan

1986

“Rtsom pa po’i lo rgyus mdor bsdus.” In *Rgyan gyi bstan bcos dbyangs can ngag gi rol mtsho*, 1–8. Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang.

(2-3) 和文資料

桂紹隆

2008

『『カーヴィヤーダルシャ』チベット註釈者の梵語理解』『印度學仏教學研究』57-1: 143 (430)–150 (423).

サンスクリット修辞法研究会

2009

「Dandin 著 *Kāvyaḍarśa* 『詩の鏡』第2章（上）—テキストならびに訳註—」『大正大学総合佛教研究所年報』31: 159–208.

辻直四郎

1973

『サンスクリット文学史』岩波書店

福田洋一

1993

『チベット理論学研究第5巻・正しい認識手段についての論理の宝庫：〈顕現〉と〈他者の排除〉(2)』東洋文庫

(ラァジャブン，紅河学院民族研究院)

Kāvyaḍarśa in Tibet:
Kham sprul's Commentary on 2.8–9

LAJIABEN

The *Kāvyaḍarśa* (Tib. *Snyan ngag me long*), a treatise on Sanskrit poetic theory authored by Daṇḍin during the seventh to eighth century, was transmitted to Tibet in the thirteenth century. It had a significant impact on Tibetan literature, giving rise to a distinctive commentarial tradition that differs from the Indian tradition. This paper delves into the commentary by Kham sprul bstan 'dzin chos kyi nyi ma (1730–1779), providing a Japanese translation of the commentary on verses 8 to 9 of chapter 2, and aims to evaluate the significance of his commentary in the context of Tibetan literature.

Kham sprul was a scholar monk of the Bka' bgyud pa and was active in Kham district of Tibet in the eighteenth century. During that time, he studied the Bka' bgyud pa's doctrine, Sanskrit grammar, poetic theory, and more under the guidance of Si tu paṅ chen chos kyi 'byung gnas (1699–1774), known as a great grammarian and scholar of poetry. Having received instruction from Si tu paṅ chen, Kham sprul deeply realized that there were many problems in the Tibetan translation of the *Kāvyaḍarśa*. At the age of twenty-five, he wrote the first draft of his commentary on the *Kāvyaḍarśa*, entitled *Dbyangs can ngag gi rol mtsho*. Over the next sixteen years, Kham sprul revised it while adding comments criticizing preceding Tibetan interpretations based on his own reading of the Sanskrit commentaries. Finally, at the age of forty-one, he completed his outstanding commentary, characterized by its insightful analysis and innovative perspectives on the *Kāvyaḍarśa*.

In regard to *Kāvyaḍarśa* 2.8–9, which addresses “the description of nature” (*svabhāvokti, rang bzhin brjod pa*), Kham sprul endeavors to convey the exact meaning of the Sanskrit original text as accurately as possible. According to Kham sprul, the description of nature is equivalent to that of a species. This entails, when describing a certain entity *x*, elucidating the diverse attributes it possesses. Through this portrayal, elements other than *x* are excluded, thus highlighting *x* as the possessor of those attributes. In explicating the description of nature or species, the concept of “exclusion of others” (*anyāpoha, gzhan sel*), originating in Buddhist epistemology, is effectively employed.

Concerning the third case markers found in the Sanskrit text of *Kāvyaḍarśa* 2.9, Kham sprul interprets them as indicating a qualifier (*viśeṣaṇa, khyad par*), based on the preceding Tibetan Commentary by Rin spungs pa and the grammatical rule cited therein from the *Kātantra*. It is noteworthy that his understanding aligns with Ratnaśrījñāna's interpretation. Given that the Tibetan translation of the same verse lacks an expression of the third case, most Tibetan commentators who do not consider the Sanskrit original text are unlikely to engage in such a grammatical discussion. In the temporal and geographical context of eighteenth-century Eastern Tibet, where the tradition of translating Sanskrit texts into Tibetan had been discontinued, Kham sprul's attempt to revive the ideas of the Sanskrit original text deserves high praise.